

# プロローグ…託された正義

移民歴 三二七年・春 | エアリーズ共和国 首都郊外 |

「ゲーム、ゲームセット、マッチ・ウォン・バイ・ヴィ  
オーラ、ゲームスカウント 6-4」

試合の勝敗が決したことを示す審判の声がテニスコ  
ートに響く。

取り巻く観客たちによる満場の拍手が勝者を称え、控  
えていた報道陣は身をかがめたまますばやく移動し、勝  
者の笑顔を……そして一部は敗者の辛苦をカメラに収め  
るべく、ポジションを取った。

次々と発生するシャッター音に應えるかのように、こ  
のシングルマッチの勝者……シズル・ヴィオーラは、  
うっすらとだけ汗の浮かぶ端正な顔に涼しげな笑みを浮  
かべる。

ネットをはさんだコートの対面では、ゲームを決める

こととなったシズルによるスマッシュを受け損ねて地面  
に両手をつけてしまった姿勢のまま、この試合の敗  
者……ハルカ・アミテージがシズルの方へとキッと振  
り向き、汗だくな表情のままシズルをにらみつけた。

そんなハルカの視線をシズルもすぐに気づくのだ  
が……その浮かべる笑顔の穏やかさをいっかな変えるこ  
とはない。

負けは負けとすぐに認め、自分の不甲斐なさに  
ハリーツと大きくひとつため息をつく……ラケットを  
手にハルカが立ち上がる。

彼女はコートの中央へと近づいていって、一瞬だけた  
めらったあとにシズルへと右手を差し出した。

「……まったく、次こそは昆布無きまでにたたきのめして

やるんだから。覚悟しときなさい！」

見事なまでの負け惜しみを堂々といつてのけるハルカの手を握り返すと……

「『昆布』やのうて、『完膚』ですやろ」と、シズルがいたって冷静にツッコミを入れる。

握手しながら赤面していくハルカと勝者の余裕を存分にまもっているシズルとのツーショットをフィルムへと刻むべく、ふたたびのシャッター音が次々に沸きおこっていた。

ガルデローベが擁する五柱がひとり、ハ嬌嬌きょうきょうの紫水晶Vシズル・ヴィオーラと、エアリーズ共和国軍の中佐であり、次期大統領の就任時にはそのマイスターオトメとなることが内定しているハルカ・アーミテージ……

この惑星エアル唯一のオトメ養成機関であるガルデローベでの在学時には、ふたりは同級であり……そして、ことあるごとに雌雄を決せないではおけない、よきライバルの関係にあった。

もっとも、たいていの場合はハルカの方から一方的に勝負を持ちかけ、シズルが体よくいなしていたのだ……

そのライバルふたりが一年前ほどのガルデローベ卒業

以来、久々に行くこととなった勝負。それがいましたがシズルの勝利で決着がついたばかりの、このテニスのシングルマッチである。

中立的な国際機関であるガルデローベからの使者として五柱が各国へと状況視察に回る巡察旅行……そのまず最初の視察先として、シズルはいまエアリーズ共和国へとやって来ていた。

巡察旅行の日程が決まったその段階で、久しぶりの再会、加えて勝負の絶好の機会とばかりに、ハルカが共和国軍から政府へと頼みこみ、このシズルとのエキシビジョンマッチを設定したというわけだ。

ガルデローベにおいて近年でもトップクラスの実力を誇るライバルふたりの卒業後初の対決とあって、この試合はエアリーズ国内だけではなく諸外国からも報道陣が押し寄せるほどの注目を浴び……ガルデローベにとっても、エアリーズ政府にとっても、格好の対外アピールの場となったのだ。

加えて……

「シズル……。それにハルカお姉さまも」

シズル側のベンチに腰をかけて、ふたりが握手を交わすのをじっと見届けていた女性がひとり、ハンドタオル

を手にして立ち上がると、コート中央へと近づいてくる。「ん？ ありがとう……。なかなか気が利くじゃない」彼女からタオルを受け取って汗だくの顔……。主にその輝く額を拭きながら、ハルカは素直に感謝の言葉を述べた。

「ナツキ……おおきにな」

シズルもタオルを受け取りながら、その女性……。ナツキ・クルーガーに優しく微笑みかけ、小さく頬をつたう汗の粒をぬぐい去る。

その瞬間をねらって、三度、シャッター音の渦が周囲を包んでいく。

ガルデローベ在学時はシズルとハルカの一年後輩であり、今年の春にガルデローベを卒業し、五柱がひとりハ氷雪の銀水晶Vとなったナツキは、その五柱としての最初の任務としてシズルの巡察旅行に同行をしていた。

シズル、ハルカとともに、彼女たちがガルデローベでかわいがり鍛え上げた、まだ就任直後の初々しさをも備えた五柱であるナツキも加わる……。これが本日、この試合においてのベストショットであることは、その場に集まった報道陣の誰もが同意するところであろう。

写真をひととおり撮影し終えるやいなや、マイクやメ

モを差し出しては試合の感想を矢継ぎ早に求めてくる報道陣に対し、「それはあとから政府を通して出すから」と、ハルカがやや大声で押さえつけるかのようにして返答する。

それでもなにがしかのコメントを引き出そうとする報道陣の勢いに、ナツキは気圧されてしまい少しずつたじろいでしまっていたが……

そんな彼女をかばうかのようにシズルが肩へと手をかけ、ハルカへと向かって何事かうなずいてみせた。

すぐさまにハルカもシズルへとうなずき返す。

それを契機として、食い下がろうとする報道陣を無視してのけると……。三人の女性はコートを横切って、シャワーやロッカーなどの施設があるクラブハウスの方へと早足げに歩を進めていく。

クラブハウス内にある応接室……

シャワーを浴びて汗を流したあと、スポーツウェアから五柱としての正装であるマイスター服へとそれぞれ着替え……。シズルとナツキはハルカから言い渡されて、この部屋で彼女の到着を待つこととなった。

シャワーを浴びるところまでは彼女と一緒にだったのだ

が、何か理由があるのかハルカだけがひとり、別の更衣室にてスポーツウェアからの着替えを行っている。

予定ではこのあと、エアリーズ政府が用意したリムジンに三人ともに乗り、首都中心部へと戻って迎賓館にて大統領をはじめとする政府要職者参加の晩餐会へと出席することとなっている。

当初は着替えが終わったあとすぐに、この郊外のスポーツ施設から出発するはずだったのだが……ふたりに話したいことがあるとのことで、無理練り時間を作ってハルカがこの応接室へとふたりを引き留めたのだ。

「どうやら完全な人払いなされているらしく、室内はもちろんのこと、廊下や窓外にも警備を含めたほかの人間の気配はまったくしない。」

「ハルカお姉さまは、いったい私たちに何の用があるんだろうな？」

「豪奢なソファへと腰掛けて応接室の調度品を眺めながら、怪訝そうな口調でナツキがシズルへと意見を求めてみる。」

「だがシズルは彼女のすぐ隣で小さく笑みで返しながら、「さあ……」とつぶやくだけだ。」

「さっきの試合について、シズルに何かいいたいことが

ある、とか……」

「いまひとつシズルが話に乗ってきてくれないので、まずは自らの推測でナツキは進めてみた。」

「ハルカの負けず嫌いな性格からして、シズルとの勝負について、あとからあれこれいうのはあり得る話であり……実際にガルデローベ在学時は、ハルカがそのようにしてシズルに突っかかっていく現場にナツキも何度か出くわしている。」

「だが、その手の話であれば、報道陣の前ならいざしらず、たとえバウムジンでの首都中央への移動中とかにしてしまえば済むことだ。」

「わざわざシズルとナツキとを、この応接室に引き留めてまでするようなことではないのか……」

「悪いわね。遅くなっちゃったわ」

「そのとき、応接室のドアが開いて、当のハルカ本人がようやくと姿を現した。」

「グレーを基調とした質実をもってよしとするエアリーズ共和国軍の制服を着込み、その肩には中佐の階級を示す記章があしらわれていた。」

「彼女自身の長身も見栄えに貢献して、実に威風堂々としたエアリーズ共和国軍の佐官に普段であれば映るのだ

が……

ドアを閉め、室内に入ろうとしている彼女は、どうい  
うわけか片手をきらびやかなその金髪へと延ばし、苦い  
表情を浮かべながら額の上のあたりを軽くさすり続けて  
いた。

「ハルカお姉さま……。さきほどボールをぶつけられた  
ところ……」

ナツキが指摘しようとするやいなや、ハルカが彼女へ  
と猛然とした勢いで振り向いて、強くにらみつける。

そして、その強烈な視線をすぐにシズルへと移す  
と……

「ええ……。見事にぶつけられてくれちゃったわよね！  
おかげでそれ以降は調子が狂いまくりだったわ！」

まくし立てるようにして彼女へと向け糾弾をした。  
さきほどのテニスのシングルマッチの中盤にて、シズ

ルが放ったスマッシュがハルカの前頭部を直撃。

一見、外からは判別しづらいのだが、打球があたった  
箇所は腫れてふくらみ、たんこぶになってしまっていた  
のだ。

たしかにシャワーを浴びていた最中もときおり痛そう  
な表情をハルカは浮かべていたような気がする……

たんこぶへのアイシング処置を人知れず行っていたた  
め、この応接室へとやってくるのが遅れたのかもしれない  
いと、ナツキは状況の推理を試みた。

「あれは……。ハルカさんの方から頭で球を打ち返しはろ  
うとされてたように、うちには見えたんですけどな」

糾弾にもいっかな動じることなく、いたって冷静にシ  
ズルが指摘して返す。

ハルカは「うっ！」とひとことだけうなって……。思い  
返したかのように、もう一度手を伸ばして、前頭部のた  
んこぶをなでた。

やはりハルカがふたりをいったん引き留めてまでしよ  
うとしていた話は、さきほどのシングルマッチに関する  
ものなのだろうか……

であれば、別にこの場所で続ける必然性はなく、首都  
中央への移動を開始すべきではないか。

その提案をナツキが口に出そうとした矢先……

「その件は、まあ、いいわ……。いざれ借りは100倍にし  
て返してやるから……。それよりふたりとも、本題なん  
だけど……」

不意にその表情が極めて真剣なものとなり……。ハルカ  
はシズルとナツキへと向き直って、あらためて語りかけ

た。

応接室の隅には貴重品管理用なのだろう、金庫がひとつ備え付けられており、軍服のポケットから鍵を取り出すとダイヤルを操作し、ハルカはその中から書類の束を取り出す。

そして、テーブルをはさんでシズルとナツキのふたりへと相對するようソファに腰掛けると、それぞれに對して書類を一部ずつ配った。

どうやら同じ内容のものが三人それぞれに用意されているのだが……その表紙にはタイトルも何もまったく書かれてはいない。

ハルカから視線で読むように促され、ふたりは表紙のページをめくって、内容をつぶさに読み込んでいく。

それは何かの調査報告書のように見受けられた。

「ハルカお姉さま、これは……？」

当然の疑問を感じ、ナツキがハルカへこの書類の出自をたずねようとするのだが……質問が彼女の口から出きってしまう前にシズルが片手をあげてその行動を制する。

ハルカはただ静かにうなずいて……とにかく先を読み

進めるように再度ナツキへと促した。

寂然としないままで、ナツキは彼女の指示に従い、ページをたぐっていく。

その書類に記載されているのは、エアリーズ国内に拠点を構える、ある貿易商に對する取り調べの記録だった。

何らかの政府機関によって捕縛されたいその貿易商は、かねてより密貿易で不正な収入を得ているという風評があり、数ヶ月間にわたる内定調査の果てに、証拠固めをして逮捕にいたったのだという。

そして、その後の取り調べの過程において、エアリーズ共和国の国防政策にも影響を与えかねない、重大な事実が発覚した。

すなわち、その貿易商はエアリーズ共和国軍払い下げの……とはいえ、まだまだ実用に耐えうる武器・弾薬を巧妙な細工を施して流通経路をごまかしたうえで、国外のある勢力へと売却していたのだ。

「シユヴァルツ……」

ナツキの口から思わずついて出てしまったその言葉を、ハルカとシズルが首を縦へと振って肯定する。

封印された科学技術の復興を目標に掲げる秘密結社であるシユヴァルツは、その実現手段としてガルデローベ、

およびオトメシステムによる世界秩序の維持を是認する各国家に対し、度重なるテロを行っている。

当然、エアリーズ共和国内においても彼らは摘発の対象となつているのだが……

「その貿易商本人は、シュヴァルツの一員つてわけじゃないみたいなんだけどね」

苦虫を噛み潰したような表情でハルカが補足する。

たしかにシュヴァルツの構成員ではないにせよ、エアリーズ自体にすら害をなしかねない勢力に対して武器を提供することで巨額の利益を得る……売国的な行為に手を染めていたことは事実だ。

そして、シズルとナツキがさらにページを進めてみると……その貿易商の自白によって、シュヴァルツとの取引において、ある国の彼らの拠点に対し、重点的に武器の輸出が行われたことが判明した。

「アンナンで近々シュヴァルツが何らかの作戦を計画しているらしい……って、ところまでは、そいつを締めあげてわかったんだけど……」

ハルカが苦々しくつぶやいたとおり、その調査報告書はひどく中途半端なところで、まるで書きかけのまま放棄されたかのように突然に終了してしまっていた。

釈然としない思いを抱いたまま、ナツキは隣に腰掛けしているシズルの表情をチラッと垣間見てみる。

彼女は書類の最後のページへと目を落としながら、無言で何事か考え事をしているかのように見える。

エアリーズでの首脳との会談を終えたあと、この巡察旅行における次の視察先として続いている訪問を予定しているのが、まさにそのアンナン王国だ。

そのことはハルカも知っており、そのうえでこの調査報告書を見せたということは、ふたりに対してアンナンでの何らかのアクションを期待していること想像に難くないのだが……

まだ何か、ひどくぼやけてしまっているものがあるように思えてしまう。

「ハルカお姉さま……。エアリーズ政府はこの件をアンナンの政府に伝達はされたのですか？」

意を決して、ナツキはハルカへと問いかけてみる。

彼女は膝の上に置いた両の拳を握り込み、いったん目をつぶって悔しげな苦悶の表情をその顔に浮かべると……

数秒ののち目を見開いて、シズルとナツキとを真っ向から見つめ込みながら、いった。

「シズル……ナツキ……。正義をなすのよ」

\* \* \*

一瞬、ハルカのいうその言葉の意味を、ふたりともに吟味し……そして先に口を開いたのはシズルの方だった。

「ハルカさんが持つてはるいうことは……この文書の出所は、エアリーズの国家安全保障局あたりやろか……」  
何も記載されていない、書類の空白の表紙へとツツとしなやかな指先を走らせながら、自らの推測を口にする。  
「どうやらそれは凶星を突いたらしく……ハルカの顔に一瞬の衝撃が走った。」

「尋問して、ここまで調査報告まとめておきながら、正式な書類にはなあってへん……。つまり、エアリーズの政府はこの件について、知らぬ存ぜぬ、決め込もうしてるいうことやね」

容赦なく指摘するその口調に、押されるように体を少しのけぞらせると……ハルカは苦渋に満ちた表情で、う

なずく。

「いまのエアリーズの政府は、倒立主義的外交政策でやっているから……。他の国のトラブルには、できるかぎりかわらうとはしないのよ」

それは「倒立主義」ではなく「孤立主義」では……というナツキのツツコミに、ハルカはコホンと咳払いひとつしてごまかした。

ハルカの言い間違いはともかくとして、現在のエアリーズ共和国政府が外交面では自国単独志向の孤立主義的な姿勢をとっているのは事実であり……他国の事項は遠ざけるようにしているのはたしかだ。

ハルカの口ぶりから察するに……今回の件については、アンナン王国でのシュヴァルツのテロ計画を事前に察知したところで、わざわざそれを通告したりはせず、黙殺してしまうという選択肢がとられたらしい。

そうすることによって、シュヴァルツによる自国への報復可能性をなくしたいという意図もあるのだろう。

しかし、エアリーズの政府が現在の政策に基づいた、そのような判断を下したとしても……国の政治・軍事にかかわる者のすべてが、その判断に納得しているわけではない。



「だって……悪の計画が進行しているっていうのに、放っておけないじゃない。本当なら私が真っ先にアンナンに行つて、アインお姉さまにこのことを報せて……一緒にシュヴァルツの連中を打ち倒したいところだわ」

ガルデローベ在学時のシズルとハルカにとって共通の先輩であり、現アンナン王国・国王グエン・バオ付のマイスターオトメであるアイン・ルーの名前を口に出しつつ……思わずその場で立ち上がって、熱弁をふるうハルカだったが……

佐官とはいえ、政府の決定を覆すほどの発言権を有しているわけではない……いち軍人ではないハルカにとって、それはそもそもできない相談ではある。

ガルデローベでよく知ったハルカの性格と現在の状況とを照らし合わせて……彼女がいま行き詰まり、どうにもできないフラストレーションをため込んでしまっていることは、シズルとナツキにとって容易に理解ができた。だからこそ、その打開策として……ハルカは世界全体の秩序維持を司る五柱であるふたりへと、悪行を放置しておけないという強い思いを……自らの正義を託したいのだから。

「その貿易商とかいうんは……いまは、どうしてます

の？」

何か方策を探ろうとしているのか、シズルがハルカへと確認を求める。

「司法取引ってヤツでね……。別件で刑に服する代わりに、絶対にシュヴァルツからは報復されないような……安全なところに連れて行かれた」

その場所が具体的にどこなのかたずねるナツキへと、ハルカはますます顔をしかめて返した。

「デスパレート刑務所よ……。あそこなら、たしかに簡単には手は出せないでしょうから」

なるほど、と……ナツキとシズルは納得の表情をその顔に浮かべる。

エアリーズ共和国内の辺境にあるデスパレート刑務所は、本来であれば強盗・殺人、あるいは政治的な犯罪はと関与した重犯罪者のみが収容される施設であり……

断崖絶壁の上に建つという地形的な要素も含め、極めて脱走が困難な作りとなっていた。

エアリーズ政府としては、司法取引の名目で唯一の証人であるその貿易商をデスパレート刑務所へと匿い、自由を奪う代わりに安全を保証する腹づもりなのだろう。

公明正大を信条とするハルカにしてみれば、ごまかしにごまかしを重ねるようなその政府決定は、とても納得のいくものではない。

「シュヴァルツの連中が何かしでかすのだとしたら……きつと、グエン王の即位記念式典に合わせてくる……。もう時間がないのよ」

こめかみを指先でつつきながら、ハルカは苛立ちが堪えきれなくなってきたのを表す。

いまから一週間ほどのち……アンナン王国のその王都では国王グエン・パオの即位四十周年を記念する式典が国家をあげての壮大な規模で開催される予定となっていた。

ナツキとシズルの今回の巡察旅行もそれに合わせた、ガルデローベからの祝賀使節としての役割も兼ねたものだ。

ハルカの推察どおり、シュヴァルツがアンナンでテロを起こすのだとすれば……その示威効果を最大とするために、この記念式典をねらってくるだろう。

いまからアンナンへと移動するのにかかる時間も考慮すると、たしかに時間は、ない。

「あんたたちが直接は動けないっていうのなら……せめ

て、この情報をアインお姉さまに伝えるだけでも……」  
「何いうてはりますの？」

奥歯をギリギリと擦り合わせながら投げかけられるハルカからの懇願へと……シズルがすぐさまに返答をする。

「たとえ有力な情報があるにせよ、ないにせよ……。シュヴァルツのテロを止めるんは五柱の役割やさかい。そうやね、ナツキ？」

シズルから突然に話を振られて、一瞬背筋をビクッと震わせたあと……「あ、ああ……」と冷静さを装ってナツキは答えた。

「ハルカさん……安心おし。今回はたまたまやけど、五柱がふたりも行くんやもの……。テロなんか、止められて当たり前どすな。そうやね、ナツキ？」

そんなナツキをジッと見つめ、シズルがふたたび……おそらくはくどくなっていると自覚したうえで確認を投げかける。

あわてたかのように何度かせわしなく頭を縦に振るナツキの姿を……ふたりのやりとりを、いぶかしげに見つめながら……

ハルカはホッとひとつだけ……安堵のため息を漏らし

た。

\* \* \*

「で……。結局、どうなのよ？ あの娘の調子は？」

迎賓館での食事会に向かう準備を、先んじてひとりで進めるように、とか……。適当な理由をつけてナツキを応接室から追いだしたあと……。シズルの前のソファへと相対するように座り、ハルカは彼女へと率直に問いかけてみる。

「どう？ って……。まあ、ハッキリいって、よくはありませぬな」

ハルカに向きあって、その瞳をのぞき込みながら、シズルはあえて平坦な口調で答えた。

「やっぱり、舞衣がいなくなったショックから立ち直れてない……。あの無駄にやる気から回ってる態度を見れば、一発でわかるけどね」

小さく肩を落とすハルカのその脳裡には、ガルデローペでのナツキの同級生であり、自分とシズルにとっては

ひとつ後輩の……。その文武に秀でた素養と面倒見のよい性格とで自分が特に気に入り、目をかけていた東方出身の少女の姿が思い浮かんでくる。

数ヶ月前……。卒業予定の本科生の中から五柱適格者を選ぶ「試しの儀」においてナツキとともに五柱のひとりに任命されたはずの彼女……。本科生のうち成績優秀者上位三名からなるトリアスの、昨年度のナンバー1だった鴉羽舞衣は……

卒業式の直前に突然ガルデローペからその姿を消し、いまだ行方不明となってしまう。

彼女にはすでに将来を約束していた男性がいて、五柱になることと、その男性と添い遂げること……。ふたつの相反する選択肢の間で煩悶し、決断することができず逃げ出してしまった、等々……。世間では口さがない噂がいくつも流されているようだが……

いずれも決定的な根拠には欠け、真の失踪理由はいまだに杳として判明しないままだ。

ただ、たしかなのは……。彼女にかかわった多くの人々の心へと、その謎の失踪が程度の差はあれ、暗い影を落としてしまっている。

特に昨年度はトリアスナンバー2として、その実力を

競い合った……ガルドローベ入学時に出会ってからずっと、舞衣の好敵手であり親友であったナツキにとっては……

失踪にいたる理由にまったく心当たりがない……失踪しなければならぬほど彼女が追い詰められていたことにまったく気づかなかったという自責の念もあり……受けたショックの大きさは関係者の中でも、最も深甚なものであった。

「もともと器用な娘やないけど……。落ち込んだることを気取られたくないから……。いつもより、ますます肩肘張ってもうて……。とてもやないけど、いまはひとりにしておくこと、できやしまへん」

応接室の外へと一瞬だけ視線を遣り……。部屋からは出て行ったナツキのその姿を求めようにして、シズルがつぶやく。

「だから、あんたもあいつの巡察旅行に付いてきたわけね……。しかも行き先が、私のいるエアリーズとアインお姉さまのいるアンナン」

ハルカからの指摘に、シズルはただ静かにこくりとだけうなずいた。

任命されたばかりの一年目とはいえ、五柱として諸国

状況を見て回る巡察旅行は、本来であればひとりで行わねばいけません。

今回については、その行き先もまったく縁もゆかりもない他国ではなく……。ひとつ上の先輩としてナツキの面倒を直接見たハルカと、さらにそのひとつ上のシズルが世話になったアインとがいる二国が選定されている。

それはある種、甘やかしとも取れる……。格別の処置ではあった。

「学園長が配慮してくれはって……。それにはうちも、感謝しとりますわ」

もちろん、そのような判断がナツキ自身やシズルの権限で行えるはずもなく……。シズルが補足したとおり、ガルドローベの代表たるマイスターオトメにして、五柱のリーダー格であるガルドローベ学園長の意志が、そこには反映されてもいた。

すでに妙齢の域に達しつつある彼女は、さほど遠くない将来……。おそらくは二・三年のうちにも引退することが、ほぼ既定路線となっており……

最近は特に、ほかの五柱の中から後継者を選定することを前提にして、諸々の判断を行っているのだという。次に学園長やるのは、あんたなんでしょう？ 部下と

して、ほかの五柱を管理するための予報演習ってこと？」  
すでにそれが決まっているかのように投げかけられる  
ハルカの質問は、近年のマイスターオトメたちの中でも  
特に秀でた実力を有しているというシズルへの世間一般  
の評に照らし合わせてみれば、至極もつともなもので  
あった。

「予報演習」ではなく「予行演習」の間違いであること  
へと端的にツッコミを入れたあと……

しかし、シズルは首を横へと振り……フツと小さな吐  
息を漏らす。

「ガルデローベの学園長いうんは、ある意味、この世界  
の中心……。五柱のひとりとしてオトメシステムを守る  
だけやのうて……。ガルデローベの代表、フミサーバーの  
管理者として、いざというときには、ほかの五柱から守  
られる存在やさかいにな……」

ふたたび彼女は応接室の外へと目を遣り……。そしてす  
ぐにまた、ハルカへと向き直った。

「守られるなんてのは、うちの柄やない。うちの力の本  
質は……。大切なものを守るためなんやし」

そう断言してのけるシズルの言葉が持つ強さに……。ハ  
ルカは思わず気圧され、のけぞりがちとなってしまう。

「だったら……」

欠番の多いいまの五柱の間から、いったい誰が次の学  
園長となるのか……。学園長にふさわしいのか……

その有力な答えはすでに出ているかのように、ハルカ  
も思う。

しかし、いまのその人物の状態を見るかぎりでは……  
その選択肢は……

「しっかし、あんた……。あの娘のいまの状態をしっか  
り把握しているわりには……。ずいぶんとプレッシャー  
をかけたものよね」

自らが懇願してふたりに動いてもらうのだという引け  
目は自覚しつつも、さきほどのシズルとナツキとのやり  
とりを思い返し……

自分自身もナツキにとっては面倒を見た先輩である  
という立場もあってか、ハルカはシズルに対して、率直な  
意見を口にした。

「それやったら……。あれはあの娘の本心を、自分でも  
再確認してもらう必要があるから……」

涼やかな笑みをその口もとに浮かべ、こともなげとい  
わんばかりにシズルが返答する。

「あの娘も五柱のひとりとして、その任には真剣に……いまは真剣すぎてすべってしまうくらい真剣に、挑もうしてはります……。このオトメシステムが支える世界を守るためなら、刃向かってくる輩は蹴散らさなあきません。その思いと目的は、あの娘もうちも同じなんや……ことにあたる前に、思い出してもらわなあかんかった」

自らの容赦なさを何の迷いもなく肯定するその冷徹なる口ぶりは……ガルデローベ入学以来ハルカの知る、シズル・ヴィオーラまさにその人を表すものであった。

「それにな……。想う人と一緒に何かことを成し遂げたというんは……恋愛の基本やさかいに」

その口もとがさらに丸みを帯びて歪むと……ハルカの反応を見たいかのように、その表情をのぞき込みながら、突然な言葉がシズルよりもたらされてきた。

「な……」

不意を突かれてしまった屈辱感を心の片隅に感じながらも、それよりもさら増して強い恥ずかしさが全身の隅々まで伝わって……ハルカは顔を紅潮させる

と、手のひらを組んでうつむき気味になってしまふ。その想いの対象がすでに明白だとはいえ、「恋愛」と

いう単語はあまりにも端的に過ぎて……いかに婉曲ではなくハッキリしたものを好むハルカとは、真っ向から受け取ってしまうには衝撃が強すぎたものだったらしい。

「ハルカはん……。あんたもそのうち……。きつとわかる日が来ます。でも、いまはまだ、そのときやない」

不意にソファから立ち上がると、傍らまで近づき……ハルカの緊張しきった肩へと手のひらをかけながら、論ずようにシズルがいう。

「誰がいったか思い出すことできへんのやけど……。力いうんは、持っただけやない……。使う頃合いも間違えたら、あきませんからな……。今回はうちに任せて、あんたはあんたがともにしたい、想う相手が力をつけてきてくれるんを……。いまはじっと待つことや……」

視線をあげたその先……シズルの険しい表情の中に、自分のことを心の底から気にかけてくれてる、その色

をたしかに感じ取って……

「ええね？」

彼女からの断定的な問いかけへと……ハルカは大きく、首を縦へと振ってうなずいた。

^二〇〇八年 十月十三日

乙 i H i M E ☆復活祭 F i v e にて刊行予定

「しずるクロニクル」本編へ続く▽